

中国帰国者子女の母語喪失の実態

一 母語保持教室に通う4名のケースを通して 一

齋藤 ひろみ

要 旨

中国帰国者の二世、三世世代の子女が母語である中国語と日本語のセミリンガルになり、どちらの言語でも十分には機能できないという問題が指摘されている。この問題は当事者のみならず社会にとっても深刻な問題であり、解決策を探ることは緊急の課題である。本稿では、母語保持教室に通う4人の帰国者子女を対象にインタビューと教室での言語行動の観察記録をデータとして母語喪失と日本語獲得の実態を記述し、母語喪失を促進する要因を探ることを試みた。その結果(1)口頭能力と読み書き能力には差があり、前者に比して、後者は喪失しやすいこと、(2)家庭での母語使用はそれだけでは母語保持の決め手とはならないこと、(3)来日時の読み書き能力の有無が母語保持か喪失かを決定する要因の一つと考えられること、の三点が明らかとなった。このことは、今後の帰国者子女への言語教育を考えるに当たって母語保持教育の有効性を示唆するものと考えられるであろう。

【キーワード】 母語の保持と喪失 学習言語と生活言語²⁾
認知的側面の発達 言語使用環境

1、はじめに

中国からの帰国者は、孤児世代が高齢化しつつあることや残留婦人（終戦当時13歳以上）の帰国が認められたこと等により、二世、三世世代の子女を伴って帰国する世帯が増加している。それに伴い、受け入れ先の小中学校では中国帰国者子女（以下帰国者子女）の問題が大きくクローズアップされ、帰国者子女を対象にした研究、調査も次第に盛んになってきている（中西1994、齋藤・箕口1995、Kiyota1995）。これらの調査により、帰国者子女の中には日本語と母語である中国語のセミリンガル¹⁾になっている児童生徒が少なくないという報告がなされている。一方母語（第一言語）と第二言語の能力の関連性について、Cummins(1986)はカナダのイマージョンプログラムの結果等から、どちらかの言語に一定のレベルの能力が有れば、潜在する認知的な能力が二言語併用

によって発達するとしている³⁾。そして、それを説明するモデルとして、両言語の間に相互依存的な発達関係が成立するというCUPモデル（共通深層能力モデル）を提示している。このモデルに関しては、追認する調査結果が報告され、学校教育での母語教育やバイリンガル教育の重要性が唱えられている（マーハ、八代1991）。

現在、児童生徒を対象とした日本語教育の分野においてもバイリンガル教育や母語保持教育が注目され始め（池上1994）、帰国者子女を取り巻く支援者組織の中でも、日本語学習への支援に加えて母語保持を支援する活動が始まりつつある。筆者はそのような活動の一つである母語保持教室にボランティアとして参加しているが、母語保持のための教室を運営する上でも、今後の小中学校での日本語及び教科の指導を行っていく上でも、帰国者子女がどのような環境でどのような過程を辿って母語である中国語を喪失していくのか、また逆にどのような環境で、どのような言語使用を行ってきた児童生徒が母語を保持しているのかについて実態を十分把握することが必要である。

そこで、本研究では、母語保持教室等の支援者への事例の提供と、今後の調査研究に向けての探索的な試みとして、母語保持教室に参加している帰国者子女を対象に母語である中国語の保持、及び喪失の実態を明らかにすることを目的とした取り組みを行った。

2、先行研究

帰国者子女の母語喪失についての調査研究は、端緒についたばかりで現段階ではまだ実証的な研究はあまり見られない。中西(1994)の外国人子女の受け入れに関する研究や、齋藤・箕口(1995)の帰国者子女の適応過程に関する調査では、各事例の母語喪失に関する記述がある。その記述からは母語の喪失過程では、読み・書き能力の喪失が速いこと、口頭能力でも聞く力（理解）と話す力（産出）の間に大きな開きが生じることが予測される。一方、帰国者子女の母語能力に的を絞って行った調査に小野(1996)やKiyota(1996)がある。小野(1996)は帰国直後の児童生徒と東京周辺に2ヶ月から9年間滞在する児童生徒を対象に中国語語彙力、日本語語彙力、算数の計算力を測定し、三者間の関係を探ることを目的に行われている。その結果、来日時には70%の児童生徒が学齢同等の中国語の語彙力を持っているが、来日1年後にはほぼ全員が学齢同等の語彙力を消失していたという報告がなされている⁴⁾。この調査は、筆記試

験によって測定しているため、口頭能力に関しては言及できないわけであるが、文字を見てその意味を理解するという能力が相当な早さで喪失していくということは明らかである。Kiyota(1995)では、来日時に母語を習得済みと考えられる10歳以上で、日本に3年以上滞在している15歳から21歳までの高校に通う帰国者子女を対象に日本語と中国語の語彙調査及びアンケートによる意識調査を行っている。その結果、二言語の語彙能力に関しては、両言語ともに困難があると認められた生徒が26%、中国語に困難がある生徒が11%であり、全体としては40%弱の生徒が中国語の語彙において喪失傾向があるということが報告されている。そして、こうした母語喪失を減算的二言語併用⁵⁾の結果として把握し、問題点を指摘している。

日本語との接触の中で母語である中国語を喪失していく過程そのものに焦点を絞った研究はまだ見られないが、他言語については次のような研究が行われている。Kaufman & Aronoff(1991)はヘブライ語を母語とする幼児を対象に二言語のコードの切り替えを観点として分析を行い、喪失段階を第一言語(以下L1)喪失開始期、バイリンガル期、L1崩壊期、個人言語完成期の4期に区分している。コードの切り替えは①1文内で生じるコードミキシング(code-mixing)、②1語内で生じるコードブレンディング(code-brending)、③文と文の間で生じるコードスイッチング(code-switching)の3種類に分類して分析を行っているが、L1喪失開始期にはコードブレンディング、バイリンガル期にはコードスイッチング及びコードミキシングが顕著に見られたという結果が出ている。また、Altenberg(1991)は母語の喪失を文法面から分析している。この研究では40年以上アメリカに滞在しているドイツ系アメリカ人を対象に統語、動詞の用法、性・単複による形式の変化に関する3種類のタスクを課し分析を行っている。その結果、(1)統語面ではそれほど喪失が起こらない、(2)語彙の運用では両言語で音声面で似通っている場合には影響を受けて不正確になる、(3)その言語特有の語彙情報は形態素の規則よりも喪失しやすいという点が指摘されている。

以上、帰国者子女の母語喪失の現状、及び言語喪失の調査方法についての先行研究を簡単に紹介したが、本研究では実態の把握を主目的とすること、中国語の母語喪失についての先行研究がないことから、他言語で行われた喪失の研究方法を手がかりに、記述を中心とした以下のような調査及び分析を試みた。

3、研究方法

3-1 研究対象者

筆者がボランティアとして関わっている「母語保持教室」に参加している中国帰国者の子女を対象とした。教室はこれまで8ヶ月間16回開かれた。参加状況は毎回7人ぐらいであるが、参加者の出入りがかなり頻繁である。今回は参加状況が比較的良好、しかもインタビューを受けている生徒4名を対象に分析することにした。4名をA、B、C、Dとし、以下にそれぞれの背景を簡単に紹介する。

	現在の身分	来日時の年齢と学年	滞日歴	家族構成
A 女	中学3年生	4歳 未就学	10年	両親 兄（同居） 兄、姉（結婚独立）
B 男	2年前高校1 年で中退後 アルバイト生活	13歳 小学1年を中途 退学後、就学せず	6年	両親 兄（結婚独立） 姉（同居）
C 女	大学1年生	6歳 未就学	13年	両親、 妹、弟
D 男	高校2年	13歳 （中学1年）	4年	両親 弟

3-2 研究方法

対象の生徒を取り囲む言語環境と、自分の言語能力に対して本人がどのような意識を持っているのかを知るために個々の生徒にインタビューを行った。また、実際に言語使用のどのような側面に母語の喪失が現れるのかを知るために教室での授業の観察と音声記録を行うとともに特徴的な事象について記述した。

3-3 観察の対象とした授業の内容

授業から得られるデータを分析する上では授業の内容が大きな意味をもつと考えられる。そこで、各生徒が参加した授業の概要を紹介する。

生徒	テキスト	授業の内容
A	北京語言学院編 『新中国語1』	単語の読み(含発音練習)文型の学習 学習した表現を利用した会話練習
B	中華書店 (外国人学習者用)	単語の読み、例文・会話文の読み テキスト話題に関連した会話

C	『中級漢語一聴和説一』 北京語言学院出版社	テキストの読み、語彙の意味用法 文章の内容把握
D	(外国人学習者用) 『初等中学校教科書』 第5,6冊人民教育出版社	関連した話題による話し合い 作文

4、調査結果

4-1 言語使用状況—インタビューの結果—

インタビューでは、言語使用の状況及び、日本語と中国語の自己評価を中心に質問したが、ここでは言語使用の状況を中心にまとめる。(枠内：4名の生徒が答えた内容)

ケース1 A (中学3年生 女)

来日直後のことについてはあまり覚えていないが、保育園では日本語が話せなかったから誰ともあまり話さなかった。小学校では授業中難しいことを言うから何も分からなかった。小学2年生の時中国に行ったときは大体聞いて分かった。去年中国に行ったときもなんとなくわかったが、言いたいことは言えなかった。両親と中国語で話す時、難しいことを言っていると何を言っているか分からない。そんなときは姉や兄に通訳をしてもらう兄や姉と話すときは日本語だけ。進学のこととか学校でいじめられたりしても中国語で言えないから両親にあまり話さない。ただ、私が日本語で話しても母が大体わかるから話は通じる。両親と兄と姉は中国語の読み・書きができるが、私には中国語を勉強しろとは言わない。

この生徒は家庭内で中国語を使用する環境にあるが、兄弟との間では日本語が使用されている。家庭外では友達も日本人であり、日本語のみを使用する環境にある。現在は親子間のコミュニケーションに支障が出ている。この生徒は両親と円滑に話がしたいという思いから、母語保持教室に通っている。

ケース2 B (19歳 アルバイト 男)

中国では両親と離れて暮らしていた。あまり話もできなかったし、物語を読んでもらったりしたこともない。小学校の頃から語文(国語)の授業は嫌いだった。今は両親とは中国語と日本語を半々ぐらい使って話す。姉とは日本語だけで会話する。両親が話す中国語が分からないこともある。逆に両親が自分が話す日本語が分からないこともある。そんなときは姉が

通訳をしてくれる。とにかく、親とはあまり話さない。中国人の友達と遊んでいるときも日本語が主。中国語で話すときもあるが言いたいことが言えないことがある。1年ぐらい前からかなあ。あまり家にいないし、中国語を話す機会がなくなったから。日本語で話している時はわからないことはあまりない。テレビを見ているとわからないことはあるけど。

この生徒の場合は家庭内で家族の成員それぞれが中国語と日本語の2言語を使用する言語環境にある。家庭外のアルバイト先では日本語、友達とは両言語を使用する環境にある。この生徒は、何となく中国語がうまくなりたいたいという程度の動機で保持教室に通っている。「カラオケで中国語で歌えたら格好良い」と発言からもその姿勢が伺える。

ケース3 C (大学1年生 女)

中国では学校に行ったことがないから、中国語を読んだり書いたりはできない。自分でも中国語の本を読んだり、中国語の検定試験のための問題集を買って勉強したりしてみたけれども、なかなか覚えられない。本を読んでいてわからないときは母に聞けば教えてもらえる。家では両親とは中国語で話して、妹たちとは日本語で話している。妹たちはほとんど中国語が話せないから、両親と話すときには私が時々通訳をしている。家を離れたら、友人もほとんど日本人だし、日本語だけで生活している。今は大学で他の言語を勉強しているから、あまり時間がないけれど、将来のことを考えると中国語もきちんと読んだり書いたりできるようになりたい。

この生徒の場合は両親との関係では中国語のみを使用し、他の兄弟とは日本語を話すという環境にある。家庭内で言語上の問題でコミュニケーションが円滑に行かないときにはその間に立って通訳をするという役目を担っている。家庭外では完全な日本語使用環境にある。

ケース4 D (高校2年生 男)

家では両親とも兄弟とも中国語で話している。話したり聞いたりするときには問題がないけど、書けない。中国語を書く機会はないがずっと書いていないから書けなくなっていると思う。友達ほとんど日本人で、学校に5人中国人がいるが、廊下であつたら挨拶する程度。だから、学校では日本語で生活している。勉強も先生が言っていることも分かるし、本も読めば分かる。日本語は来て1年半ぐらいたった頃から聞く方は大丈夫になった。話す方は2年半ぐらいたってから困らなくなった。今は、「いたい

！」、「まじい！」等の無意識に出てくる言葉も日本語が多い。教科では来てすぐの頃は算数が一番簡単だったけれど、今は好きなもの（教科）の成績が良いかなあ。

この生徒の場合は家庭では中国語を使用する環境にある。家庭外では日本語の使用が中心であるが、学校以外の中国人の友達とは二言語を使用する環境にある。

4-2 母語保持及び喪失の状況—観察及び音声記録の分析結果—

次に、母語保持教室での観察及び音声録音により、4名の生徒の母語の保持及び喪失状況を具体的に記述していく。分析の観点を授業内容毎に次のように設定し、分析を試みた。

- | | | |
|-----|-------------------|--------|
| 読解 | ①文字の読み（発音、四声を含める） | |
| | ②語彙の意味 | ③文章の理解 |
| 作文力 | ④表記 | ⑤文法 |
| 会話 | ⑥コードの切り替え | |

ケース1 A（中学3年生 女）

文字は全く読めない。中国語の発音記号（拼音）が読めないために、自分では文字の読み方が調べられない。単語レベルでも文章レベルでも読み書きは全くできない。文を構成する一つ一つの単語の意味が分かったとしても文章全体の意味が分からないことが多く、文法の知識もかなり喪失していると見られる。聞く方は日常生活の中で非常によく使われる固定的な表現(formulaic speech)や単語については、聞いて分かる。例えば「吃饭吧（ご飯食べなさい）」、「现在几点？（今何時）」、「你的名字叫什么？（名前は何て言うの）」等の表現である。しかし、それ以上の内容を含んだ複雑な文になると分からない。また、中国語を聞いて理解できたとしても、答えや反応は全て日本語であり、コードのスイッチが行われ、本人も中国語ではどう言えばよいか分からないと言っている。

以上の実態から、来日時（幼少時）に有していた中国語力をほぼ失っており、母語が第二言語である日本語によって置き換えられたケースと考えられる。⁵⁾ この生徒の場合、日常会話等の生活言語としての日本語には全く問題がなく、ネイティブの日本人とほぼ同じように話している。学習言語としての日本語に関しては、日本語指導に当たった先生の話では小学3年レベルの漢字が書けな

いということであり、学年相当の学力はついていないと考えられる。

ケース2 B (19歳 アルバイト 男)

文字はほとんど読めないし、発音記号(拼音)も分からない。非母語話者用の中国語の初級テキスト『新中国語』の最初から順に読み進めてみたが、「**什麼**(何)」「**也**(~も)」「**作**(作る)」と言った日常の会話に頻繁に使われる文字(単語でもある)も読めなかった。ただし、単語の発音如果能分ればこの初級テキストレベルの単語や文であれば意味は理解できる。一旦読み方がわかった文字は、2週間後の授業でもほぼ読むことができた。一度、中級レベルの生徒と一緒に「**故事**」を読んだことがあったが、その時には分からない単語が多かったことや、指示語が何を指しているのか理解できなかったり複雑な文の構造が把握できなかったために、物語の内容が理解できなかった。

日常会話では聞いたり話したりすることに問題はない。しかし、中国語のやり取りでは1、2単語での応答が多く、説明などを求められ長く話さなければならない場面では日本語にコードをスイッチする。また、授業の内容から離れた個人的な話になると、相手がどちらの言語を話そうと日本語にスイッチする。

以上の実態から、来日時(13歳)の時点で中国語の読み書き能力が付いていなかったために、来日後は第2言語である日本語が優勢となり、中国語が急速に失われていったケースと考えられる。この生徒の場合、日本語にもかなり大きな問題を抱えている。例えば、日本語でのやり取りも、一、二単語による応答が主で、発音が聞き取りにくいいため、相手が彼の話し方になれるまではコミュニケーションが円滑に進まない。

ケース3 C (大学1年生 女)

外国人学習者用の中級用のテキストでも、所々読めない字がある。例えば「**感**(感じる)」「**閑事**(余計な事)」「**其实**(実は)」「**未**(まだ)」など日常的に用いられる単語が読めなかった。しかし、ほとんどの場合は読み方が分からないだけで、発音があった段階でその語の意味は理解できる。意味の分からなかったことばは「**敲竹杠**(たかる)」「**各取所需**(おのおの必要なだけを取る)」等特殊な表現や四字熟語の類や日常生活では使わない単語であった。文章の理解力は中級レベルのテキストでは問題がなかったが、中国の初等中学の教科書の場合は、意味の分からない単語が多く理解に困難が生じていた。作文では、普段の会話と同じような内容の作文でも字を間違ったり、字が思い出せずに書けないという表記の面での問題と、単文を単に列挙した文

章を書いており、文の構成や接続のし方が単純で羅列に近いという点が特徴として挙げられる。文法上の間違いは見られなかった。

外国人学習者用の中級のテキストの一般的な話題（中国人の交際、中国人の結婚等）の文章についての話し合いでは聞いたり話したりすることに全く問題がない。また、中国人の友人との日常会話でも特に困難はないようである。母語教室では中国語で話そうと意識しており、中国語の学習中に日本語にスイッチすることはない。学習を離れた場で友人と話す時には日本語で話している。

この生徒の場合、就学前に来日し初等、中等教育は全て日本語で受け、大学にも進学しており、ネイティブ同等の日本語の能力を持つ。母語である中国語よりも日本語が優勢となっている。一方で家庭内の言語として中国語を使っているため、中国語を話す聞く能力が維持されている。中国語の読み書きは本人によれば中国語の勉強を意識的に行って今のレベルまで高めて来たということである。中国語の能力を維持し、高めてきたケースである。

ケース4 D（高校2年生）

外国人学習者用中級テキストは文字の読み、及び文章の意味の把握とも全く問題がない。中国の初等中学の3年生の教科書では、読めない文字や、わずかではあるが意味の分からない単語もあった。読めない文字は「罹」「允」「陞」「穿」、意味の分からない単語は「启发(啓発)」「迹象(前兆)」「迄今(これまで)」等であり、教科書で学習のポイントとして取り上げられているものであった。分からない単語に関しては、前後の文章から類推して読み進めており、文章全体の内容把握には支障はなかった。この他、「蹙足(てんそく)」等の中国の歴史的・文化的背景を持つ語に関しては全く知識が無い場合もあった。読んだ文章をまとめて書くという作業では、簡潔にまとめてあり文法的な誤りはなかったが、問題は表記であり日常的に使用している語彙でも書けないものが少なくなかった。本人は、普段中国語を書くという活動をしていないために思ったように書けないという感想を漏らしていた。

これまで、日常的な会話や文章についての感想を話し合う等の活動を観察した限りでは、聞く・話すに関しては全く問題がない。相手が日本語か中国語かどちらの言葉で話しかけてくるかに合わせてコードをスイッチしている。

この生徒は来日4年にして日本語を不自由なく使いこなせるようになっており、日本語の習得に成功し、同時に話す・聞く・読む能力においては、中国語の力もほぼ維持できているケースである。

4-3、考察

インタビューと観察及び音声記録の分析によって得られた結果の総合的な考察を試みる。まず、4名に関して見えてきた中国語の保持・及び喪失の状況、来日時の年齢、滞日歴、日本語の能力を下の表に簡単にまとめた。ここでの、日本語の能力とは母語保持教室での会話やインタビューから筆者が判断したものである。

	来日時年齢	滞日	日本語の能力	中国語の能力
A	4歳 未就学	10年	ネイティブ同等。 生活面では問題なし 学習面で問題あり。	家庭内で交わされる簡単な会話は聞いて分かるが、話せない。読み・書きは未習得。
B	13歳 小1中退	6年	生活言語も未習得だが何とかコミュニケーションは取れる。	日常的な会話で簡単なやり取りができる。読み・書きはほぼ喪失。
C	6歳 未就学	13年	ネイティブ同等。 生活、学習面共に問題なし。	日常の会話には問題がない。読み・書きは独学で学習して外国人の学習者の中級レベルに達している。
D	13歳 中学1年	4年	生活言語は習得。学習面で聞くのは何とか、読みは問題無し。	4技能とも中学1年生レベルの能力は維持できている。書く能力は徐々に喪失傾向。

以下、言語使用環境、来日時の年齢及び学年、4技能の喪失の速さの違い、喪失の具体的現象、という4つのポイントから喪失の要因とそのプロセスを探る。

4-3-1 言語使用環境と母語喪失の関連性

4-1のインタビュー結果から、4つのケース全てで家庭では元々中国語を使用していたことがわかる。しかし、中国語の言語使用環境下にあっても、A、Bのケースでは口頭能力にも喪失が見られる。Bは中国人の友人が多いにもかかわらず彼らとも日本語で話をしており、地域社会で主流の日本語を使用している内に母語が第二言語である日本語によって置き換えられつつあるものと思われる。家庭内ではモノリンガル型少数派言語使用の環境（少数派言語の保持伸長を促しながら同時に社会を含めた大きな視点からバイリンガル環境が与えられる言語環境）にあっても現実的には必ずしも理論通りには行かず、母語の保持は難しいという指摘（山本1991）がA、B二つのケースにも認められる。

家庭内で漠然と中国語を使用するだけではなく、本人及び家族が母語保持の強い意志を持ち努力してこそ、ようやく話す・聞く能力が保持されるものと思われる。Kiyota(1995)の調査では、日本語の能力如何に関わらず帰国者生徒達は中国語よりも日本語を話そうとするというアンケート結果が出ている。これは、中国語という少数派言語に対する一般社会のイメージが大きく関わっていると考えられ、母語の喪失に関しては言語使用環境に加えて、帰国者子女を取り巻く社会が中国の文化や言語に対してどのような価値観を抱いているかという点からも要因を探っていく必要がある。

4-3-2 来日時の年齢及び学年と母語喪失との関連性

Aは4歳、Cは6歳で来日、BとDは13歳で来日しているが、Bは中国では小学校1年で中退しその後は教育を受けていなかった。ここでは来日時の年齢と学年という点から母語の喪失の要因について考察する。Aのケースからは、来日時において4歳レベルの母語能力しかない場合、家庭内で母語を使用する環境であっても母語をほぼ喪失してしまう可能性があることが示唆される。また、Cのケースのように6歳（未就学）で来日しても、聞く・話す能力では母語能力を維持できる例もある。しかし、読み・書き能力の発達、維持、喪失は来日後の学習の有無によって決定されると言えよう。来日時に既に一定程度の母語が獲得されていたと考えられるB、Dのケースについて見てみると、Bには母語の喪失が見られ、Dはほぼ母語が維持できている。CUPモデルでは共通深層能力とは認知面の能力を要するタスクで働く力を指しているが、来日時の認知面での能力の有無が母語の保持及び喪失を決定する要因と考えると、次のような説明が可能である。Bの場合、小学校1年の途中で退学しており、学校教育を通して育成されるであろう読み・書き能力及び思考能力・認知の面での発達がないままに来日してしまったことが母語喪失の原因となっていると考えられる。一方、同じ13歳で来日したDであるが、中学一年修了後来日しており、しかも、家庭でもかなり教育に熱心だったという事から、来日時においては学年相当の学力と認知面での能力を持っていたと考えられ、共通深層能力として機能する認知面の一定程度の発達があったために、母語の喪失も少なく、第二言語の習得においても成功した。このように考えると、中国で小学校修了程度の教育を受け、認知面で一定程度発達してから来日した帰国者子女の場合には母語の保持において有利であると言えよう。

中島(1985)は日本人海外在住子女の日本語の保持について、離日時の年齢と

喪失していく能力について二つの数居があり、第一に6歳前後で話し言葉に、第二に10歳前後で学力言語に数居があるというあると述べている。つまり、第一の数居を越えてから第二言語への接触が多くなった場合には第一言語の話し言葉は維持できるが、それ以前であれば、話し言葉も維持できず第二言語が優位になるということである。本調査の結果に照らし合わせてみると、年齢という一つの尺度からは中島(1985)の知見に全く一致するとは言い難いが、話す能力と学力言語或いは認知面での能力に関してそれぞれに数居があるという点では一致していると言えよう。

4-3-3 4技能による喪失の速さの違い

4技能による喪失の速さの相異という点から見ると、BやDのケースから口頭能力よりも読み・書き能力の喪失が速いことが確認できる。口頭能力に関してもAのケースの「簡単な日常よく使う表現なら聞いて分かるが中国語では答えられない」、Bのケースの「中国語で話しかけても答えるときには日本語にコードをスイッチする」という点から、聞く能力(理解)に比べ話す能力(産出)の喪失が顕著である言えそうである。読み・書き能力に関しては、Dは「中国の中学3年生の教科書がほぼ読めるが漢字は常に使っているようなものでも間違え」ており、表記能力の喪失が相当な速さで進むと言えよう。

Cummins & Swain(1986)は文脈への依存度と、認知活動の必要性という二つの軸で言語能力を捉えるモデル(言語能力発達モデル)⁹⁾を提起しているが、このモデルによれば概念の理解や、抽象的なテーマについて話し合ったり文章を書いたりするという能力は場面依存度が低く認知活動の必要性の高い所に位置する。つまり、読み・書きは場面依存度が低く認知依存度が高い活動が多く、抽象的思考や認知面の能力をかなり投影していると言える。Dのように中国語の読み・書き能力が高い場合、両言語による相互依存の関係が成立するための認知的側面での能力があると考えられ⁹⁾、そうではない児童生徒に比べ母語の保持が容易であると考えられる。来日時の読み・書き能力が母語の保持或いは喪失を決定づける要因の一つと考えることが可能であろう。

4-3-4 具体的な喪失現象

音声面での誤りはあまり見られない。尚、この4名のケースではなく他の生徒に見られた現象であるが、中国語には同一の語彙でも用法によって(品詞も変わる)四声が異なるものが少なくないが、来日2年目でその四声が不正確になっている例があった。しかし、全体としては喪失はほとんど進行しないと

えよう。

語彙に関しては、非日常的な語彙の喪失が見られた。ただし、学習していなかったために分からなかったのか、喪失なのか、なかなか判断できないものがある。その他注目に値すると思われるものとして、読みの活動において日常的に用いている語彙でも文字を見て読めず、そのために意味も掴めないというケースがあった。このような場合でも文字の読みがわかれば、たいていは意味にも用法にも問題はなかった。

文法構造については、産出（話す・書く）された中国語に関しては、形態素や文法のレベルでは間違いがなかった。しかし、談話レベルになった場合にはどうかという点に関しては、データが少ないためにここでは言及を控えたい。また、話す・書く能力において劣っていると見られる場合でも理解（聞く・読む）に関しては語彙が分かれば文の構造や意味が理解できており、文法における喪失と思われる躓きは見られなかった。

コードの切り替えに関してはこの4名の場合は文と文の間でのスイッチが主であり、一文内、単語内での切り替えはほとんど見られなかった。しかし、この4名のケースではないが、トランプをしているとき、ゲームに関連する特別な用語が日本語で分からない場合にその言葉だけを中国語で話すという、一文内での切り替え、つまりコードミキシングも見られた。Kaufman & Aronoff (1991)によれば、両者共にバイリンガル期に顕著に見られる現象ということであるが、確かに、ほぼ日本語のモノリンガルになりつつあるAは普段の会話では中国語へのコードの切り替えはほとんど現れていなかった。

5、まとめ

本研究を通し、母語保持及び喪失の実態をかなり詳しく知ることができた。今後の課題としては、個々の喪失現象に的を絞った研究が考えられる。具体的には、今回の文法面に見られる喪失やコードスイッチングの分析方法の精度を高めると同時に、第一言語の文法判断力¹¹⁾や、喪失過程で用いられる補償ストラテジー¹²⁾をもデータとし、喪失のプロセスを総体的に捉え明らかにしていく方向で進めていきたいと思う。

<注釈>

- 1) セミリンガルとはどちらの言語でも抽象的思考ができず複雑な表現もできない多言語使用者のことを指す。(マーハ、八代 1991)
- 2) ここでは、Cummins(1990)が提起した言語能力の二つの側面の一方、コミュニケーション上必要とされる能力B I C S (Basic Interparsonal Communicative Skills)を生活言語、もう一方の思考及び認知的発達を促す能力C A L P (Cognitive Academic Language Proficiency)を学習言語と呼んでいる。
- 3) 閾値仮説 (threshold hypotheses) と言われている説で、認知的側面とは知能、多様な思考 (divergent thinking) 学力、メタ言語能力等を指す。
- 4) 小野(1996)では「学年相当」とは2学年下の学年レベルまでの幅を認める。
- 5) 結果として第一言語である母語が使われなくなり、第二言語によって置き換えられていくような二言語弊用を指す(岡崎1995)
- 6) 中国語は問題が無く日本語に本語に困難がある生徒が47%、二言語とも困難がある生徒が26%、両言語とみに問題がない生徒16%、中国語に困難があり、日本に問題がない生徒11%であった。
- 7) 「母語が置き換わる」という表現については議論の余地があると思われるが、ここでは減産的の二言語併用の結果、社会の主流言語が母語よりも優勢となり、母語が失われていく状況を示す。
- 8) 相互依存モデルでは「特に読み書きで第一言語、第二言語のどちらかを使用すると、学習動機があつて学校、家庭、地域社会でその言語に十分接触できれば、等の言語だけでなく他方の言語の能力も発達する」という言及がなされている。(岡崎1995)
- 9) これは前出のB I C SとC U L Pという2つの言語能力の捉え方を発展させたモデルである。
- 10) Seliger(1991)は母語の保持者は第一言語の文法判断ができるが、喪失者は第二言語の文法知識を利用して第一言語の文法判断をすとし、第一言語の非文をどう判断するかで、母語の喪失状況を判断する方法を提起している。
- 11) Turian & Altenberg(1991)は補償ストラテジーの枠組みで、子供の自然な状況下での会話をデータとして喪失過程を分析している。

<参考文献>

池上 摩希子(1994) 「中国帰国生徒」に対する日本語教育の役割と課題一

- 第二言語教育としての日本語教育の視点から一」『日本語教育』83号
- 岡崎 敏雄(1995)「年少者言語教育の再構成—年少者日本語教育の視点から—」
『日本語教育』86号
- 小野 博(1997)「外国人子女を対象とした母語能力評価とその重要性」
『第18回異文化間教育学会大会発表抄録』
- 齋藤 正彦・箕口 雅博(1995)『中国帰国孤児二世(11歳以下帰国者)の
適応過程に関する追跡研究』平成4～6年度科学研究費補助金研究成果
報告書
- ジョン・C・マーハ 八代 京子編(1991)『日本のバイリンガリズム』
研究社出版
- 山本 雅代(1991)「ファミリーバイリンガリズム」同上 第5章
- 中島 和子(1985)「日系子女の日本語教育」『日本語教育』66号
- 中西 晃(1994)『外国人児童・生徒の受け入れとその指導・教育に関する実
践的研究』平成4、5年度科学研究費補助金研究成果報告書
- Altenberg E.P. (1991) Assessing first language vulnerability to
attrition. in Seliger & Vago (ed.) *First language Attrition*.
Cambridge University Press. New York
- Cummins, J. & Swain, M. (1986) *Bilingualism in Education*. Longman. London
- Kiyota yoichi (1995) *The Development of Bilingual Proficiency A Case
Study of the Children of War Orphans from China*
The University of Tokyo, Graduate Division of international and
interdisciplinary Studies, Language and Information Science
- Seliger, H.W. (1991) Language attrition, reduced redundancy, and creativity.
in Seliger & Vago (ed.) *First language Attrition*.
- Kaufman, D. & Aronoff, M. (1991) Morphological disintegration and
reconstruction. in first language attrition. in Seliger & Vago (ed.)
First language Attrition
- Turian, D. & Altenberg, E.P. Compensatory strategies of child first
language attrition. in Seliger & Vago (ed.) *First language Attrition*

(お茶の水女子大学人間文化研究科2年)